エ門その他十数人の詰所である。

関ケ原以来、実に二百六十年、徳川幕藩体制も崩壊の寸前にあった。勤皇だ佐幕だといって世はまさに物情騒然、欧米の文明開化の波が一度におし寄せて来た。庶民は封建制度の重圧からようやく目覚めて、下克上の時代となった。こうしたなかで、経済の行き詰りは武士階級の生活を極度におびやかしていた。

江戸小石川久堅町にある藩公松平家の内情も容易でなかった。領民の重税ぐらいでは到底まかないきれない。長沼領にもいろいろ献金制度を設けられた。例えば苗字御許しは金子十両更に帯刀御免は金子二十両などなど。こうした混乱した世相のなかで、目付小山利吉が博徒と通じ、なれ合いの生活をしていたことは当然のことかも知れない。あるいは毒をもって毒を制する仕組ともいえる。

自宅では、賭場の開帳もし、しかも屋敷の地下には蹴下し穴があったとも伝えられていた。

駒吉は、数年の後に、関東ではおしもおされもしない博打仲間の顔役にのし上っていた。奥州の駒、いや、白河屋駒吉として、日光に筑波山麓に八溝山中馬頭鳥山にと出向いた。

長沼にも、大勢の子分や客分を連れてきて、たびたび賭場を開いている。勢至堂峠追分、弁財天ケ原にと人家は好まなかったらしい。

情婦も数人いたなかで、「お松」は陰に陽に添うように同棲していた。家老内山の麓に仮の住いをして安らかな日を送った時もある。

ここには自然の清水が湧き出ていた。村人は駒の行状を知っているが気にもとめない。お松には近親